

学位論文要旨

家庭教育における子供の生活技能習得に関する研究

—親の子育て観に着目して—

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 教科教育学分野  
人間生活教育学領域

D191477 梶山曜子

## 研究の背景及び目的

子供たちは生活技能を身に付けることによって、生活者として身近な環境と積極的にかかわり、自分と環境との関係性を問いながら日々の生活を営み、創造していくことが可能になる<sup>1)</sup>。生活技能を身に付けるためには、実践や体験の中での訓練が必要であり<sup>2)</sup>、家庭教育の中で生活技能を身に付けさせることの重要性について再考することは、子供たちが主体的な生活者としての成長、発達する環境を保障するために不可欠である。近年、家庭の教育力が低下していると言われており、「基本的な生活習慣が身に付いていない」、「過保護・甘やかせ過ぎの親の増加」、「しつけや教育に無関心な親の増加」等が指摘されている<sup>3)</sup>。ベネッセコーポレーションの子育て生活基本調査<sup>4)</sup>の結果では、小学生の子供をもつ今日の母親は、教育を家庭の役割だと認識し、家庭教育の重要性は理解しているものの、子供の生活自立への関心や満足度は低く、それよりもいわゆる学力を上げることを重視している傾向が伺える。このような実態調査や分析から、従来の家庭教育は日常生活を通して、親の世代から子の世代に生活に関わる知識や技能を伝え、子供を自立させることであったが、近年の親たちは、家庭教育によって子供の生活自立を担うという意識は低く、生活技能を身に付けさせることに対する優先順位は低いのではないかと推察される。本研究では、そのような親の子育て観と子供の生活技能習得との関係に着目し、子供の生活技能習得に対する親の意識や実態を調査し、子育て観との関係を明らかにすることを目的とした。本論文は、わが国では一般的に、家庭教育の中心的役割を果たしている母親に焦点をあてて追究する。それらを明らかにすることによって、子供の生活技能習得の在り方に対する示唆を得たい。

なお、本研究では生活技能を「衣食住等の生活の自立の基礎となる日常生活に必要な基礎的・基本的技能」と捉えることとし、主に手を使って表現する行動であり、行動特性として身に付き、能力化され、主体化されるものと定義する。我が国の家政学は、「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境の相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である」と定義されており<sup>5)</sup>、その目的は、よりよい生活を実現するために生活問題を予防し解決しようとする個人・家族・コミュニティをエンパワー（励まし支援する）し、家政学で行われた諸研究が教育をも含む実践的な諸活動に生かされることによって達成できるとされている<sup>6)</sup>。本研究でも、調査による分析結果を実践的な諸活動に生かしたいと考える。

## 研究の方法

本研究の目的を達成するために、本論文は序章と終章を含む6章で構成した。第1章では、子供の生活技能習得に関する先行研究の分析から課題を整理し、第2章では、親の子育て観と子どもの生活技能習得との関係を調査によって捉えた。第3章では、第2章の結果を踏まえて、製作技能に焦点をあて、その意義を親と子双方を対象とした質問紙調査の分析によって明らかにした。第4章では、第2章、第3章の結果を踏まえて、親の子育て観の変容を促す協働的製作活動の実践を試み、その成果を捉えた。

### (第1章)

子供の生活技能習得と生活自立の現状、家庭教育における子供の生活技能習得の捉え方、子供の生活技能習得の必要性和親の子育て観について、先行研究の成果と課題を整理した。

### (第2章)

親の子育て観及び母親からみた父親の生活態度と子供の生活技能習得との関係を明らかにするために、広島県の小学校5,6年生の児童をもつ母親183名を対象として、2013年10月～12月に郵送による質

問紙調査を行った。また、夫妻の子育て観の違いと子供の生活技能習得との関連を明らかにするために、広島県の小学生の子供もつ夫妻 5 組を対象として、2017 年 2 月に質問紙調査を行った。子育て観は田村(1978)<sup>7)</sup>、浜島(1991)<sup>8)</sup>の先行研究を参考に生活重視項目、学業優先項目の 2 軸 4 象限で両方位型、生活重視型、学業優先型、消極型の 4 つに分類した。さらに、5 組の夫妻の内、協力を得られた父親 3 名に対して半構造化面接を行った。面接調査の分析では、録音した音声データから逐語録を作成後 SCAT (大谷 2008, 2011)<sup>9),10)</sup>による質的分析を行った。

### (第 3 章)

第 2 章の結果を踏まえて、生活技能の中の製作技能に焦点をあて、親と子の製作活動に対する意識と実態を親の立場から明らかにするために、広島県の幼稚園児をもつ母親 247 名を対象として、2007 年 9 月に質問紙調査を行った。また、親と子の製作活動における製作物の受贈経験についての意識と実態を子の立場から明らかにするために、H 大学の大学生 (男子 71 名, 女子 128 名, 計 199 名) を対象として、2016 年 7 月～9 月に、質問紙調査を行った。

### (第 4 章)

本研究を継続、発展させるための示唆を得るために、第 2 章、第 3 章の結果を踏まえて、親の子育て観の変容を促す協働的製作活動のプログラムを実践し、その成果と課題を明らかにした。

## 研究の結果及び考察

### (第 1 章)

子供の生活技能習得に関する先行研究から課題を整理した結果、次のような知見を得た。

子供の生活技能習得の現状として、2007 年度の国立教育政策研究所の「大根のいちょう切り」の実技調査<sup>11)</sup>の結果において、適切に切れた生徒は約 3 割であったことが報告されている。岡 (2013)<sup>12)</sup>はこれらの生活技能が習得できていない背景には、家庭で子供が料理を手伝う機会が少なくなったことや、家庭科や技術・家庭科の授業時数が少なく調理実習に十分時間がかけられない状況等があることを指摘している。また川端ら (2010)<sup>13)</sup>は糸結びテストの結果を通して、児童・生徒の手指の巧緻性が低下の一途にあることを 1995 年の調査と比較して明らかにしている。手指の巧緻性低下の要因として、便利な生活と創造性の乏しい遊びの中で、日常的に手指を使う機会が減っていることを指摘しており、その結果、できて当たり前であった生活技能が身に付いておらず、それらの伝承もなされていないことを報告している。

小学生の子供をもつ親の子育て観について、朝永 (2012)<sup>14)</sup>は、しつけや教育について家庭の役割だと考える母親は増加していることを明らかにしている。また、山岡 (2012)<sup>15)</sup>は、「子育てへの気付き」として近年割合が増加している項目は「学校の宿題や予習・復習」と「子供の進路」であり、逆に割合が減少している項目は「食事のしつけ」、「子供の食事のとり方」、「生活リズムと起床・就寝時間」であると述べている。柏木 (2008)<sup>16)</sup>は、日本の親には可能な限り子供を家におき、食事等の世話をし、自分ができることを精一杯してやるのがよい子育てだという考えがあり、それが親の愛情だと考えていることを指摘している。宮本 (2001)<sup>17)</sup>は、就職した成人の子と同居親に関する研究において、「できるだけことをしてやる」といった親の思いや態度が過剰で、しかも長期化していることが、現在の日本の親子、家族の特徴であることを明らかにしている。以上のことから、小学生の子供をもつ今日の日本の母親は、家庭教育の重要性は理解しているものの、わが子の生活自立への関心や満足度は低く、それよりも学校の成績を上げることを重視している傾向が伺える。さらに、親たちは日常生活の中で子供に家事をさせ

ることを肯定していないのではないかと推察される。そのような子育て観や家庭教育態度が子供の生活技能習得に影響を及ぼしていると考えられる。

中央教育審議会答申<sup>18)~24)</sup>において、家庭教育への政策的介入が強力に推進されるようになってきたことが読み取れ、子供の社会化や自立を支えるのは、家庭・親の責任であることが政策的に重要視されていると捉えることができる。一方、母親だけではなく、父親による家庭教育に対する社会的関心やそれに係る研究が近年増加している。父親が家庭教育に関与することが母親や子供に望ましい影響をもたらす<sup>25)</sup>とされている一方で、日本の父親が子供と接する時間は母親に比べて極めて短いことは国際的な比較研究からも明らかである<sup>26)</sup>。従って、家庭教育の中心的な役割を未だ母親が担っており、子供の生活技能習得には母親の子育て観が影響を及ぼすと推察した。

## (第2章)

子供の生活技能習得に及ぼす親の子育て観の影響を明らかにするために、母親の子育て観と子供の生活技能習得との関係についての質問紙調査を行った結果、次のような知見を得た<sup>27)</sup>。

母親の子育て観と子供の生活技能習得との関係では、家庭科学習内容に対する関心度や家庭科で身に付ける内容の重要度への認識、家庭科学習内容について教えた経験については有意な関連がみられ、「学業優先型」や「両方位型」の母親は、家庭科への関心が高く、重要だと認識していた。特に栄養素や道徳的な内容に関心や重要性を感じているが、実際には、日常生活の中で子供たちに積極的に教えていないことが明らかとなった。一方で、「生活重視型」の母親は、家庭科に対しての関心度や重要度は「学業優先型」や「両方位型」に比べると低い、日常生活の中で子供たちに積極的に教えている傾向がうかがえた。また「消極型」の母親は、家庭科学習内容に対する関心度や重要度は低く、教えている割合も低かった。以上の結果から、母親の子育て観の違いが、家庭科学習内容に対する認識の違いに影響を及ぼしていることが示唆された。子供の性別によって、家庭科学習内容への関心度や学習内容について教えた経験に有意差がみられたが、家庭科で身に付ける内容の重要度の認識には、有意な関連はみられなかった。この結果から、母親たちは子供の性別にかかわらず、家庭科学習内容の重要性を認識していることが明らかとなった。しかし、男子の母親は、「家庭生活における男女平等」は重要であると認識する傾向があるにもかかわらず、女子に比べて家事技能を教える頻度が低いという結果がみられた。このことから、母親の家庭生活における男女平等意識は、実際の対応には反映されていないと考えられる。母親たちが学校で教えるべきだと答えた項目で最も多かったのが「ミシン縫い」、「基礎縫い」、「製作」等の製作技能であった。これらの生活技能について、母親たちは子育て観にかかわらず、必要だと考えており、それらの技能を教える自信がないために学校で教えてほしいと家庭外教育に期待している様子がうかがえた。母親たちは小学校家庭科で子供がそれらの技能を習得することを望んでいると考えられ、小学校で習得しなければその後、習得する機会は少ないと考えていることが推察された。

本調査では、家庭での実践度は母親たちの子育て観や子供の性別によって異なり、子育ての現場は少なからず性別役割分業観にとらわれていることが明らかになった。そしてそれは、次世代にも影響が残ると考えられる。このような教育態度をとっていることに対して、母親たちの自覚が低いことが課題ではないかと考える。特に男子の母親たちには家庭生活における男女平等意識が実際の教育態度に反映されていない面があることに気付く機会が必要と思われる。

「子供の生活技能実践度」は、「母親の家庭科関心度」( $p<.01$ )、「母親の家事分担意識」( $p<.01$ )、「母親の家事分担割合」( $p<.001$ )、「子供の家事分担割合」( $p<.01$ )、「今後の暮らし向き」( $p<.05$ )との

間に有意な関連がみられた。母親が家族で家事を分担していると思っており、家庭科に対する関心度が高い方が、子供の生活技能の実践度が高いことが明らかとなった。

母親からみた父親の生活態度と子供の生活技能習得との関係では、「夫婦関心共有度」と「子供の生活技能習得度及び実践度」との間には関連があり、「夫婦関心共有度」が高い方が「習得度」と「実践度」ともに高いことが明らかとなった<sup>28)</sup>。子供が生活技能を習得し実践していくためには、夫婦が関心事を共有している関係であることが影響していることが示唆された。また、父親の年代が若いほど「習得度」は高くなる傾向があることが明らかとなった。それは特に食の生活技能において顕著であった。しかしながら、「実践度」において父親の年代との間には「洗濯物をたたんでしまう」( $p<.05$ )の1項目以外は関連性がみられなかった。つまり、父親の年代とできるかできないか(習得度)とは関連があるが、するかしないか(実践度)とはあまり関連がないといえる。一方、品田の調査(2008)<sup>29)</sup>においては、父親の年齢が若いほど、男子に家事をさせていると報告されており、一般にジェンダーへのこだわりは親の年齢が若いほど薄れていくと推察している。しかしながら、本調査では生活技能実践度において子供の性別との間に有意な関連はみられなかったことから、父親の年齢にかかわらず、子供の性別による家事への期待は多様であることが推察された。

さらに、「父親の子育て協力度」と「子供の生活技能習得度」とは関連があり、父親が子育てに協力的である方が子供の生活技能の習得度が高かった。特に衣や住生活関連の生活技能の習得において顕著であり、子供が衣や住の生活技能を習得するには、父親が子育てに積極的に協力することが重要であると推察される。また、実際に子供と直接的に関わるのが難しい場合でも、父親の態度を母親が肯定的に捉えていることが影響している可能性が示唆された。

夫妻の子育て観の違いが子供の生活技能習得に及ぼす影響についても追究したところ、夫妻がともに同じ子育て観をもっているわけではなく、父親は消極型が多く、同じ子供に対しての生活技能習得度や実践度に対する認識が夫妻で異なり、特に消極型の父親は子供が生活技能を習得、実践する必要性の認識が低いことが明らかとなった。消極型父親3名に対する半構造化面接のSCATによる分析により、ストーリー・ラインを「成育歴」、「自身の家事能力の認知」、「ワーク・ライフバランス」、「子供の関わりと夫婦の関係性」、「子供の生活技能習得の認知」、「ジェンダー意識」、「家庭科イメージ」の7つの項目に整理した。これにより、いずれの消極型父親も性別役割分業意識のある家庭や父親不在の家庭で育った生育歴がジェンダー意識や子育て観に影響し、子供の生活技能習得に対して消極的になっている可能性が示唆された。しかし、いずれの父親も家庭科教科書(小学校)閲覧後に家庭科イメージやジェンダー観の変化がみられたことから、子育て世代の父親に子供が学習している家庭科の学習内容を理解してもらう場を作ることが、子供の生活技能習得の促進につながるのではないかと考えられた。

### (第3章)

生活技能の中でも、家庭では教えられないが必要性が高いと認識されている「手縫い」、「ミシン縫い」等の製作技能に着目し、その習得意義について、手芸・裁縫活動の製作経験や製作物受贈経験の実態調査によって追究した。

まず、親の立場からの園児の母親対象とした調査の分析からは、次のような知見を得た<sup>30)</sup>。

手芸・裁縫の基礎的技能の習得率は高く、いずれも「家庭科」で学んだとする者が最も多かった。次に、手芸・裁縫の「嗜好意識」は肯定派と否定派が拮抗していたが、手芸・裁縫の「嗜好意識」と「実践度」には有意な関係性がみられ( $p<.001$ )、手芸・裁縫が好きであるほど実践する者が多かった。さらに、手

芸・裁縫の「実践度」と「基礎的技能の習得度」には有意な関連がみられた ( $p<.05$ ) ことから、基礎技能の習得が実践につながることを示唆された。

また、手芸・裁縫の「実践度」と「子供のための手作り経験」には有意な関連がみられた ( $p<.001$ ) ことから、子供の存在が手芸・裁縫を行う大きな要因であることが推察された。加えて、手芸・裁縫の「嗜好意識」と「実践度」、 「子供のための手作り経験」に有意な関連がみられた (いずれも  $p<.001$ ) ことから、家庭科の製作実習では、基礎的技能の習得にとどまらず、作る楽しみを実感できる教材や学習方法によって学ぶこと、さらには、誰かのために作ることの意義が示唆された。

次に、子の立場でのH大学の大学生を対象とした調査の分析からは、次のような知見を得た<sup>31)</sup>。

基本的な裁縫技能の学習状況は、男女ともに家庭科で教師から教えてもらった者が最も多く、次いで母親で父親からは1人であった。また、手作り品をもらった経験がある者は56.8%であり、母親からもらった者が49.3%と最も多く、父親からは1.1%と少なかった。さらに、もらった手作り品に対して、もらった当時の気持ちも現在の気持ちも「肯定」群が多かった。しかし、もらった当時はその意図を考えられなかった「低関心」群や、恥ずかしかった等の「否定」群も、現在の気持ちでは「肯定」群に変化していた。また、手作り品の製作経験の有無では、手作り品を製作した経験がある者は58.3%で、一人で作った者が最も多かった。一緒に作った相手でも多かったのが友人で、次いで母親、祖母であり、父親と一緒に製作した者はいなかった。また、手作り品をもらった経験がある者の方が経験がない者より、「子供のために手芸・裁縫技術を向上させたい」、「子供と一緒に手作り体験をしたい」、「手作り品は親子間の愛情表現になる」、「手芸・裁縫技術を次世代に伝えていく必要がある」と思っていた (いずれも  $p<.001$ )。さらに、将来子供の手作り品を作りたいと思っている者の方が作りたくないと思っている者より、「親になる上で裁縫技術は必要である」、「手芸・裁縫技術を次世代に伝えていく必要がある」と思っていた (いずれも  $p<.001$ )。子供のことを思いながら手芸・裁縫活動することは、作る側である親の生活の豊かさや価値を問い直す機会になることが示唆されたが、もらった子供の側も手作り品を通して生活価値意識を問い直す機会になることが示された。また、技能伝達にとどまらないコミュニケーション作用をとまなう手芸・裁縫活動を親子で行うことは、子供の生活技能習得に効果があるばかりではなく、親の子育て観の変容にもつながると推察された。

#### (第4章)

親と子の協働的製作活動による、子供の生活技能習得や親の子育て観への更なる示唆を得るために、地域から支える子供の製作技能習得プログラムを構想、実践した。実践後の子供及び保護者への質問紙調査結果の分析により、次のような知見を得た<sup>32)</sup>。

講座を受講した子供たちは、自分の家での手伝いに対しては「楽しい」あるいは「面白い」等比較的肯定的に捉えていたが、その内容は「食器の配膳」等の食生活関連や「そうじ」等の住生活関連が多かった。保護者調査からも同様の結果が得られ、普段子供にさせている衣生活関連の手伝いとしては「洗濯物たたみ」や「洗濯物取り込み」等の回答はあったが、針と糸を使ったボタン付け等も行われていなかった。活動後の子供の変化としては「針と糸をもつ機会が増えた」、「細かい作業が好きになった」、「家の仕事に興味をもつようになった」、「集中できるようになった」等の回答があり、針と糸を使った活動は「手縫い」の技能習得だけでなく、集中力の発揮や完成する喜び等、精神的な成長を促す可能性があることが示唆された。本講座では、地域の高校生との異世代交流の場を設けた結果、すべての保護者が異世代である高校生と交流してよかったと回答しており、「普段高校生とは交流がないのでよかった」、「大きくなった自

分の娘の成長を想像した」等の意見があった。また、保護者は学校教育による生活技能の習得に期待をしている一方で、生活技能を習得させるのは5年生よりも早い方がよいと思っている割合が高かった。さらに、子供が興味をもった時に習得させたいと思っている一方で、時間や余裕がないため家では習得する機会がないと思っていた。以上のことから、協働的製作活動は、子供の生活技能習得だけでなく、異世代交流による家庭教育支援の可能性が示唆された。このような活動の効果は、短期間にみることはできないと推察され、継続していくことの重要性が示唆された。

## 今後の課題と展望

本研究では、親の子育て観に着目し、子供の生活技能習得との関係を明らかにしたが、母親だけではなく父親の関わりによる子供の生活技能習得の差異もみられた。しかしながら、父親への直接調査は、半構造化面接調査は行ったが、大規模な質問紙調査は行ってはいない。質問紙調査を行うにあたっては、父親独自の子育て観分類を検討する必要がある。また、生活技能の習得実態において、客観的に判断する必要もある。さらに、現在の子育て支援や家庭教育支援における生活技能教育の現状、小学校家庭科の生活技能教育の実態、及び学校と家庭の連携事例等を明らかにする必要もあろう。加えて、本研究で実践した協働的製作活動の場が子供の生活技能習得と親の子育て観の変容を促す可能性が示唆されたが、このような活動の効果は、短期間で検証することは難しい。今後もこのような実践を継続していくために、地域との連携の在り方を検討する必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) 鈴木明子, 「子供の生活実態と家庭科」, 多々納道子・福田公子編『教育実践力をつける家庭科教育法』, 大学教育出版, p.32, 2008
- 2) 秋山晴子, 出石康子, 菊澤康子, 富士田亮子, 山崎古都子, 『生活経営論(第2版)』, 建帛社, pp.117-128, 2000
- 3) 牧野カツコ, 渡辺秀樹, 中野洋恵, 『国際比較にみる世界の家族と子育て』, ミネルヴァ書房, 序文 p.2, 2010
- 4) 木村敬子, Benesse 教育研究開発センター編, 「子どものしつけ・教育観(第4回子育て生活基本調査報告書:小学生・中学生の保護者を対象に)」, 研究所報 65, pp.47-65, 2012
- 5) (一社)日本家政学会(編), 『「家政学将来構想1984」』, 光生館, p.32, 1984
- 6) (一社)日本家政学会, 家政学原論部会編, 『やさしい家政学原論』, 建帛社, p.145, 2018
- 7) 田村喜代, 「社会階層と母親の教育態度(第一報):対象の特性と態度類型の設定」, 東京学芸大学紀要, 第6部門, 産業技術・家政 30, pp.115-128, 1987
- 8) 浜島京子, 渡会奈都子, 「親の家庭生活態度と家庭科に対する意識」, 福島大学教育実践研究紀要, (20), pp.77-86, 1991
- 9) 大谷尚, 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き -」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54 (2), pp.27-44, 2008
- 10) 大谷尚, 「質的研究シリーズ SCAT-Steps for Coding and Theorization-明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」, 日本感性工学会, 感性工学 = Journal of

Japan Society of Kansei Engineering 10 (3), pp.155-160, 2011

- 11) 国立教育政策研究所, 「技術・家庭における基礎・基本となる知識・技能, 生活で活用する力に関する調査」, 2007, [http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei\\_gika/07002073033004003.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_gika/07002073033004003.pdf)  
(2014.7.31.閲覧)
- 12) 岡陽子, 「知・徳・体の学びを支えている生活」日本家庭科教育学会編『生きる力をそなえた子どもたち』, 学文社, p.50, 2010
- 13) 川端博子, 田中美幸, 鳴海多恵子, 「生活の自立, 学力と児童の手指の巧緻性に関する研究」, 日本家政学会誌, Vol.61, No2, pp.73-80, 2010
- 14) 朝永昌孝, Benesse 教育研究開発センター編, 「学校 (第4回子育て生活基本調査報告書: 小学生・中学生の保護者を対象に)」研究所報 65, pp.97-108, 2012
- 15) 山岡テイ, Benesse 教育研究開発センター編, 「子育ての気がかり・情報環境 (第4回子育て生活基本調査報告書: 小学・中学生の保護者を対象に)」研究所報 65, pp.15-31, 2012
- 16) 柏木恵子, 『子どもが育つ条件—家族心理学から考える—』, 岩波書店, p.85, 2008
- 17) 宮本みち子, 『ポスト青年期と親子戦略-大人になる意味と形の変容-』, 勁草書房, pp.222-235, 2004
- 18) 中央教育審議会 1996/7 答申等 (21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm), (2014.08.29 閲覧)
- 19) 中央教育審議会 1998/6 答申等, 「新しい時代を拓く心を育てるために」—次世代を育てる心を失う危機— (中央教育審議会 (答申) 平成10年6月30日), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm), (2014.08.29 閲覧)
- 20) 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について(答申)」2003年3月20日, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1334208.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1334208.htm),  
(2014.08.29 閲覧)
- 21) 文部科学省 HP, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm),  
(2015.01.10 閲覧)
- 22) 文部科学省 HP, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/attach/1325361.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/attach/1325361.htm), (2015.01.10 閲覧)
- 23) 文部科学省 HP, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houan/an/06042712/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm), (2014.08.29 閲覧)
- 24) 文部科学省 HP, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/asagohan/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/asagohan/), (2014.08.29 閲覧)
- 25) 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子, 『子どもの発達と父親の枠割』, ミネルヴァ書房, pp.77-180, 1996
- 26) 多賀太, 「性別役割分業が否定される中での父親役割(<特集 II>近代家族の揺らぎと親子関係)」, フォーラム現代社会学 (4), pp.48-56, 2005
- 27) 梶山曜子, 鈴木明子, 「母親の子育て観と家庭科学習内容に対する意識との関係:—小学校高学年児童の母親への質問紙調査の分析より—」, 日本家政学会誌, 67(5), pp. 266-275, 2016
- 28) 梶山曜子, 鈴木明子, 「母親からみた父親の生活態度と児童の生活技能習得との関連」, 日本家政学



会誌, 69(11), pp. 757-767, 2018

- 29) 品田知美, 「子どもに家事をさせるということー母親ともう一つの教育的態度ー」, 本田由紀編『女性の就業と親子関係ー母親たちの階層戦略ー』, 勁草書房, pp.148-166, 2008
- 30) 梶山曜子, 下窪美咲, 鈴木明子, 「幼稚園児をもつ母親の手芸・裁縫活動に対する意識と実態」, 日本家政学会誌, 66(2), pp.65-72, 2015
- 31) 梶山曜子, 中村誉子, 魏曉敏, 竹吉昭人, 村上かおり, 鈴木明子, 「大学生の手芸・裁縫活動の意識に及ぼす手作り品の受贈経験の影響」, 日本家政学会誌, 72(4), pp. 218-229, 2021
- 32) 梶山曜子, 中村誉子, 魏曉敏, 竹吉昭人, 正保正恵, 村上かおり, 鈴木明子, 「地域から支える家庭と子どもの生活技能教育プログラムの構想: 親と子の「背守り」刺繍体験講座の実践から」, 広島大学大学院人間社会科学部研究科紀要, 教育学研究, (1), pp.588-597, 2020